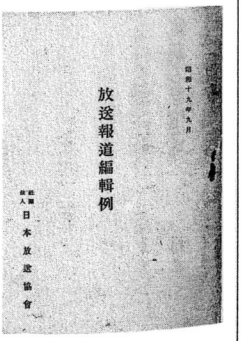
集書日誌31

戦時下の『放送報道編輯例』

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

高円寺の飛鳥書房から、日本放送協会の『放送報道編輯例』（昭和19年9月30日、非売品）を得た。放送報道文作りのための、例文を交えたA5判三八二頁のマニュアル本である。〈読む報道〉ではなく〈聞く報道〉の原稿作りの要諦として、○簡潔な達文でなければならない。○主語を文節の初めに置く。○段落を多くする。○用語は平明第一で、口語調をとり、文語調をやめる。○漢文脈と欧米文直訳体をさける。○名詞止めを少くする。○助詞を省略しない。○外来語、難解漢語をさける等、十三項目が説かれているが、意外だったのは、○放送の性質上不適当な語句を用ひない、の例として「殉国の英霊」の「殉国」、「散華された勇士」の「散華」、「虱つぶし」等が挙げられていることだ。昭和十九年はすでに戦況が悪化し、「殉国の英霊」が急増し、多くの「散華の勇士」が生み出されて逝った悲痛な時代状況への配慮からなのか。また同じ十九年の九月一日から、学童疎開が実施され、文字通りの虱つぶしを日課とした生活が始まってもいたはずなのに。

いま一つ、これは当時の時代の雰囲気を想起すれば当然と言える事ではあるが、〈宮廷報道の編輯に当っては、まづ不敬な言葉や省略方法のないやう、注意することが肝要〉と説かれているように、所謂「宮廷報道」は、その文体用語共に他の報道と相当著しい差異があり、殊に敬語の扱いには細心の注意が払われていた。山本五十六元帥の国葬の際の報道文には、次のような注記が見られる。〈山本元帥は臣下であるから皇族に対する敬語と区別する一方、元帥の戦死であり、国葬であるから、特別に敬弔の意を示す用語が要求される。このために皇族の「神鎮めまゐらす」に対して「齋きまゐらす」を用い「鎮まられた」と云ふ敬語にして「神鎮まる」をさける。又「お迎へ申し上げる」「迎へる」をさけて「お迎へする」とし、「御到着遊ばされました」「到着しました」をさけて「到着されました」とする〉とある。日本放送協会㊙の内部文書『宮廷敬語』（昭和10年4月、43頁・索引9頁　アクセント付記）ある所以である。また、この分野では、東大井の松林堂書店から入手した野尻一郎著『皇室の儀制と敬語』（昭和17年10月、新光閣）がある。